

老朽下水管こんなに!

2025年度予算案クイズ

ワイワイ やって見たよ

お米が高くて大変!

みんなで読むから楽しい

鹿児島・きりしま準備支部



和やかに、真剣にクイズに挑戦!

「班会・小组は、ま... ずしんぶんタイムから... 始めましょう。県本... 部常任委員会は、支... もと、行動への原動力

主張

東京電力福島第一原発事故から14年を迎えます。福島(は)は今も「帰還困難区域」が7市町村に広く残され、2万5000人以上が避難を続けています。政府は抜本的な対策をしないままALPS処理水(汚染水)の海洋放出を続け、さらに除染土を全国の道路工事や農地整備などの公共事業で再利用できるよ

除し、「最大限活用」へと転換したことに、原発事故被災地の福島をはじめ、各地から抗議の声が上がっています。この間、政府は再稼働や老朽原発の稼働延長など原発推進に前のめりの姿勢を取り、基本計画ではさらに、いま稼働している原発の2倍以上に増やそうとしています。原発事故から教訓を学ばず、むしろなかったかのように原発を推進することは到底許されません。

原発ゼロ、再エネ推進の声を広げましょう

昨年、能登半島地震では、志賀(石川)や柏崎刈羽原発(新潟)でトラブルが発生しましたが、道路の寸断や家屋倒壊で避難も、屋内退避もできないことが分かりました。地震大国の日本で原発を稼働させることは無謀の極みです。新婦人も参加する原発をなくす全国連絡会は、50万人目標の新署名への賛同と「原発推進政策を撤回し、再生可能エネルギーへの転換をめざす全国行動」(3月16日)への参加を呼びかけています。原発ゼロの日本へ、声を上げていきましょう。

と考えるからです。先日、きりしま準備支部の合同班会に参加して、さっそく「今日は予算案クイズ(2月15日号)に挑戦しましょう。難しいですよ」としんぶんタイムから開始。「ええっ、そうなの?」と、会員たちは笑いながらも真剣に答えを見つけていきます。「さあ、正解は? 一問の答えから〇〇さん読んでください」と交代で読み合わせ。すると、つぶやきが聞こえてきます。「病気が増えて薬も次々出されると、医療費のかかること! びっくりよね」

「老朽下水管、こんなにあるの? 今度水道代が上がるんですよ。まさか、私たちに払わせる?」「防災庁設置に向けた予算、イタリヤと比べるとすごい違いね。日本の貧弱さがよくわかる」「アメリカは日本にますます防衛費負担を押しつけるよ。私たちの税金よ」。みんな、国政と自分の生活を結びつけて考えています。終わると、「クイズをやって、みんなで読むと記事がすうっと頭に入ってくる。一人で読むのと違うね」「しんぶんの力はすごい」と、充実したしんぶんタイムとなりました。その後の支部再建に向けた話し合いもスムーズに運び、班会の定例化も決まりました。

安心して話せるタイムが魅力

山形・奥直属 新庄わらび班



おしゃべりが楽しみ

毎月の班会でしんぶんタイムをとっているわらび班。「自分では読まない記事も班会で読むと、みんなの思いが聞けて深まる」「新しいことが分かるのが楽しい。また来たいと思う」「近所のお茶飲みでは話せないことが話せる」と大好評です。以前の班会は年に3〜4回で、毎回、手間をかけた楽しい企画をやっていたので、毎月開催は重い課題でした。班長が60代の方に交代し、県本部から「そんなに手をかけたものじゃなくていいから、気軽にやってみようよ」と声をかけられ、しんぶんタイムでおしゃべりを中心に気軽に、と、今では毎月開くようになり、班会が安心して話せる大事な時間になっていきます。1月の班会で、「私たちがでなく周りの女性たちもそういう場がないんじゃない?」「そうか、そういう人を班会に誘えばいいんだね」と話に。新婦人が緊急にとりくんだ「選択的夫婦別姓アンケート」に読者のAさんが答えてくれたことがわかり、「Aさんが出してくれたんだ」と大喜び、次回の班会にお誘いしようと相談しました。2月の班会にさつきAさんを誘うと、ゲストで参加。この日は2月15日号1面のクイズでおしゃべり。口頃からモヤモヤがいっぱいで、「主食のお米が投機の対象ってひどくない?食べられなくなったら生きていけない」「高額療養費の上限額引き上げひどい!弱い人たちをいじめている」と盛り上がり、その後「新婦人で一緒に」とすすめる「来月も参加します」とうれしい入会となりました。

母の歴史

聞き書き

宮崎県 上西祐子さんのお話 (9)

第3回国連軍縮総会(1986年6月)には、全国の生協から2300人の組合員をはじめ、市民団体等の代表千人近くが参加。ニューヨークでは、国連本部での討論傍聴や代表部への要請行動、国際デモなどに参加しました。

私にとっては初めてのアメリカ。想像とは違って、商店にはセールの札が貼ってあり、大きなオンボロ車が走り、空き缶を拾いながら街を歩く人もいてびっくり。昼食時には道路脇に屋台が並び、オ



新婦人都城支部のみんなと山登り(前列左が上西さん、1994年)

フィスから出て来た人がラッシュを買って道路脇で食べていたことにも驚きました。私はこの行動を通して、同じグループの沖縄の方と

核廃絶から沖縄へ 行動広げて

親しくなりました。帰国後彼女が宮崎を訪れ、このつながりで、宮崎県民生協が平和活動として沖縄戦や基地問題を学習すべく沖縄に行く機会にもなりました。個人的にも何度も沖縄に足を運びました。1991年、県民生協の理事を辞し、新婦人都城支部の支部委員、その後、事務局長等を務めました。当時はまだ会員も若く、行事の時は子どもたちも大勢いて、大変にぎやかでした。私は年配者の会員と共に山登りやハイキングなどを計画し、霧島登山やハイキング等を計画し、池巡りなど大変喜ばれました。